

江戸前の男

春風亭柳朝一代記

吉川潮



新潮文庫

え ど まえ 男
江戸 前 の

—春風亭柳朝一代記—

新潮文庫

よ - 21 - 1



平成十一年四月一日発行

著 者 吉 川 潮
よし かわ うしお

発 行 者 佐 藤 隆 信
さとう たかのぶ

発 行 所 株式 新 潮 社
しんしやうしゃ

郵便番号 一六二―八七二一

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三三三二六六―五四四〇)

電話 読者係(〇三三三二六六―五一一)

振替 〇〇一四〇―五一八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Ushio Yoshikawa 1996 Printed in Japan

ISBN4-10-137621-2 C0176

江苏工业学院图书馆

江戸前男
蔵書章
春風亭柳朝一代品

吉川潮著

新潮社版

目 次

序章	夢の酒	9
第一章	くやみ	15
第二章	代書屋	40
第三章	大工調べ	62
第四章	寄合酒	90
第五章	五人廻し	116
第六章	粗忽の釘	138
第七章	宿屋の仇討	161
第八章	天災	187
第九章	鮑のし	214
第十章	浮世床	236
第十一章	看板のピン	263

第十二章	らくだ	288
第十三章	子別れ	313
第十四章	火焰太鼓	342
第十五章	初天神	367
第十六章	火事息子	389
第十七章	三方一両損	418
第十八章	稽古屋	445
第十九章	牡丹灯籠	473
第二十章	ねずみ	498
最終章	茶の湯	522

江戸前の男―春風亭柳朝一代記―

序章 夢の酒

柳朝は夢を見ていた。

酒を飲んでいる。

脳血栓で倒れて以来だから、九年ぶりの酒だ。なんだかとても懐かしい味がする。辺りを見回すと、そこは楽屋であつた。壁に大きなポスターが貼つてある。

「四天王の会」

平成三年・二月七日、午後六時半開演

会場・イイノホール

出演・春風亭柳朝 立川談志 三遊亭円楽 古今亭志ん朝

入場料三千円

……見覚えがあると思ったら、イイノホールの楽屋だった。志ん朝と「二朝会」という落語会を開いていたところだ。

二つ目時代、柳朝は照蔵、談志は小ゑん、円楽は全生、志ん朝は朝太という芸名で、四人とも昭和三十七年から三十八年の間に真打に昇進したこともあって、「落語界の四天王」と呼ばれた。

四人揃っての落語会なんて何十年ぶりだろう。

ポスターには出し物も書いてあった。

前座代わりの小朝が『稽古屋』、トップが志ん朝の『火焰太鼓』、円楽の『宮戸川』でお中入り。中後に四人そろっての口上があつて、談志の『源平』、トリは柳朝の『宿屋の仇討』とある。

俺が四天王の筆頭ということでトリに回してくれたのか。『宿屋の仇討』は十八番だ。でも、俺はもう落語ができない……。

「柳朝兄貴。支度、できた？」

志ん朝が顔を出した。

相変わらずいい着物を着てやがる。「二朝会」では、芸だけでなく高座着でも競ったもんだ。

脇^{わき}では円楽と談志が話をしている。

『芝浜』のあの亭主なんだがね」

談志がそう言うのを円楽が途中で遮り、

「うん。それはね。昔、ヘミングウェイが……」

「おい、よせよ。なんで『老人と海』が出てくんだよ。すごいね、こいつは」
談志が笑った。意味のない会話のようだが、二人は面白がっている。

柳朝は二人の会話に割り込みたかった。昔は必ず楽屋の会話に入って、パーパー吹きまくったものだ。思うように舌が回らないのがもどかしい。

「師匠。そろそろ用意して下さい」

一朝が声を掛けた。柳朝の信頼厚い一番弟子である。

「口上がありますから、黒紋付に袴^{はかま}です」

二番弟子の小朝が高座着を出す。

おい、二人とも何を言ってるんだ。俺がしゃべれないのはわかってるだろうが。

口上があるって言ったな。

今の俺は落語どころか口上も無理だ。満足に舌が回らねえんだからな。歯切れがよくって威勢がよかったころの柳朝を覚えているお客様に、みっともねえ姿をさらしたくない。俺はもう高座には上がらねえと決めたんだ。

柳朝は湯飲みの酒を一気に呷あおった。

「おい、出番前に飲んでいいのかい」

柳朝が「正ちゃん」と呼ぶマツサージ師の須藤が顔を出した。嘶はなしか家になる前から世話になっている恩人だ。

正ちゃん。いいんだよ。おいらはもう落語ができねえんだから。もうそろそろあの世に行くことにすらあ。

あの世にや、文楽師匠もいれば志ん生師匠もいる。円生師匠、三木助師匠、俺が大好きだった可楽師匠も。三平、馬生、つばめ、馬の助と、同じ世代の仲間が大勢いる。誰よりも林家の親父おやじが俺の行くのを待っているじゃねえか。

「……あんちゃん、迎えに来たよ」

とたんに林家彦六ひさろくが現われた。いや、柳朝にとっては八代目林家正蔵だ。白装束で頭に三角の白い布を付けている。まるで得意の怪談噺で前座が扮かんする幽霊みたい。

師匠にお迎えに来られたんじやしようがねえ。すぐに支度をします。

おい、小朝。着物は黒紋付じゃなくて白無垢しろむくだよ。

言い付けると、女房のヨリが顔を出した。

「あんた。行っちゃうのかい」

ああ。師匠がお迎えに来てくれたから、そろそろこの世ともおさらばするよ。

おめえには苦勞を掛けたなあ。元氣なうちは金の苦勞ばかりさせて、病氣になつてからは付きつ切りで看病だ。すまねえと思つてゐるぜ。

泣くなよ。俺はあの世に行くのを喜んでゐるんだ。

さあ、みんな。しめつぽいのは嫌いだよ。

わつと、陽氣に送つてくれ。

弟子ども、鳴り物を頼むぞ。

テンテンテンテン、ドドン。

小朝が太鼓を打つと、お囃子^{はやし}さんが三味線を弾き始める。一朝が笛を吹き、三番弟子の正朝が鉦^{ヨスケ}を鳴らす。四番弟子の勢朝と末弟の茶々丸が、声を揃えて「ご苦勞さまです」と送り出す。

出囃子の「さつまさ」に乗つて柳朝は歩き出した。身体^{からだ}が宙に浮いて雲の上を歩いているような感じがする。

正蔵がさつさと歩いて行く。

師匠。待つて下さいよ。相変わらずせっかちなんだから。

白無垢の裾^{すそ}が長いんで、足にまとわりついて歩きづらいったらありやしねえんで。

なんですって？ 死ねば足がなくなるから歩きやすくなるって。

そういえば師匠は足がありませんね。

昔っからお足には縁のない師匠でしたからねえ。

「つべこべ言ってねえで、早く歩きな」

おっと。師匠の雷が落ちた。

へい。久し振りに師匠に怒られて、うれしゅうござんす。

あの世で噺家修業のやり直した。

さあ、師匠。参りましょう。

第一章 くやみ

1

平成三年二月七日朝――。

春風亭小朝は風の音で目が覚めた。

渋谷区初台にある小朝の自宅。三年前に林家三平の次女の泰葉やすはと結婚して構えた新所帯である。

風で飛ばされた小石が、二階の窓ガラスにコツン、コツンと二、三度当たった。

その瞬間、「死んだ……」と直感した。

師匠の柳朝がである。

別に靈感が強いわけではないが、虫の知らせとでもいうのだろうか。時計を見ると、